

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月21日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02772

研究課題名(和文) 日英語対照による語形成と音韻構造に関する発展的研究

研究課題名(英文) Further research on word formation and phonological structure through contrasting Japanese and English

研究代表者

太田 聡 (OHTA, Satoshi)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：40194162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語と英語の複合(compounding)、派生(derivation)、混成(blending)といった語形成のメカニズムについて、主に音韻的な制約や規則の面から考察した。そして、特に例外的なパターンを示すものがなぜ・どのようにして生成されるのかを論じた。また、様々な語形成が行われるレキシコン(語彙部門)の内部構造や役割についても考察し、日英語のレキシコンの構造の違いを一部明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、単に語形成にはどのような規則性があるのかを論じるだけでなく、語形成が行われるレキシコンが、文法システム全体の中でどのように位置づけられ、そして、レキシコンはどのような構造と役割を果たしているのかを明らかにした。また、日本語と英語のように、類型論的に大いに異なり、系統的にも無関係な言語の語形成過程を比較することで、言語個別的な法則の発見にとどまらず、より普遍的な原理等を解明できた。

研究成果の概要(英文)：In this research, I examined the mechanisms of word formation relating to compounding, derivation and blending in English and Japanese, mainly in terms of phonological constraints and rules. I particularly discussed why and how non-standard patterns are generated. In addition, I considered the internal structure and role of the lexicon (lexical component), where various word formation processes happen, and was able to clarify some differences in the structure of the lexicon in Japanese and English.

研究分野：英語学

キーワード：複合語 混成語 派生語 アクセント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者である太田は、30年近くにわたって、語の派生・複合・屈折・借用・短縮に伴って生じるアクセントや分節音の変化などに関する研究に取り組んできた。そして、典型的・標準的なパターンはほぼ説明できたが、非標準的なアクセントパターンを持つ例や、制約に違反する例などが、なぜ・どのように生成されるのかという問題を解決する必要があった。

2. 研究の目的

本研究では、日本語と英語の複合、派生、混成などの語形成のメカニズムを、例外的なパターンと目されてきたものにも注目して、総合的に再検討し、そこで働く原理や制約などを明らかにする。また、語形成が主に行われるレキシコンの構造や役割、並びに、レキシコンと文法の他の部門との相互作用などについても考察し、それを適切に捉えるにはどのような文法モデルが妥当であるのかを論じる。

3. 研究の方法

ほぼ毎週開かれる山口大学英語学研究会、及び、毎月開かれる関西音韻論研究会にできるだけ出席し、他の参加者の研究発表から新しいアイデアを吸収すると同時に、自身も精力的に研究発表を行って、様々なコメントや批評・批判を仰ぐようにする。また、所属する学会の大会や、国内外で開かれる国際会議でも研究発表を行うように努め、自身の論考を精巧なものへと練り上げて、学会誌等に投稿する。

4. 研究成果

(1) 形容詞を名詞に変化させる接尾辞の代表的なものとして、英語では -ness と -ity、日本語では「-さ」と「-み」が知られている。そして、-ness は -ity よりも多くの語に付加が可能であるように、「-さ」の付く語は「-み」の付く語よりも多いという生産性の類似点から、-ness に相当するのが「-さ」であり、-ity に相当するのが「-み」である、という指摘が従来なされてきた。しかしながら、-ness が付加した語では一切アクセントが移動しないのに対して、「-さ」が付加する語では、例えば「しろ'い し'ろさ」のようにアクセントが通常変化する。また、「-み」も、例えば「つよ'い つよみ'」のように、「-さ」の場合とは異なる)アクセントの変化をもたらす。よって、英語の派生語のアクセントパターンを説明するために提案してきたレキシコンの中での規則配置の考え方 生産的な語ほど特定の規則が適用されないようになっていくというもの が、日本語の派生語のアクセントの変化の説明では成り立たないことを論じた。そして、生産性の高い語と低い語のどちらにも、アクセントに関する規則が適用できるシステムを示した。さらに、レキシコンの中で、アクセントに関して、暗記するしかない事柄と、暗記していなくても計算できる事柄が、どのように別々に収められているのかというモデルを提案した。

(2) 混成語は、日本語も英語も、右側(後半)の語の長さに合わせて作るのが一般的である。例えば、breakfast + lunch brunch では、brunch が lunch と同じく 1 音節になっている。しかしながら、例えば、「バカ + カップル バカカップル」のように、右の原語よりも長い混成語が作られることもある。そしてこの場合の特徴は、(下線を付したように、)左の原語の終わりの部分と、右の原語のはじめの部分に同じ音が含まれていることである。このように、同音が含まれている場合には、その同音を生かして洒落を飛ばしてみたいという意識が働くのだと推察できる。そこで、このタイプの混成を「ダジャレ混成」と命名し、その生成のメカニズムをフォーマルに示した。そして、英語の場合にも、例えば travel + lodge Travelodge のように、同音が含まれる場合には、右の原語よりも長い混成語が作られる傾向があることを明らかにした。

(3) 日本語の複合語のアクセントは、例えば「さと + ここ'ろ さとご'ころ(里心)」のように、通常は 2 語の境界に近いところ(後半要素の最初か、前半要素の最後)に与えられる。しかしながら、例えば「け'んぼう + かいせい け'んぼうかいせい(憲法改正)」のように、アクセントが移動せず、それぞれの語が持つアクセントがそのまま複合語のアクセントとなる例もある。こういった複合語は、アクセントの計算において、前半要素と後半要素が独立しているといえる。このアクセント独立型の複合語の特徴は、(前半要素が後半要素を修飾する関係ではなく、)前半要素が、後半要素が意味する行為等の対象物という関係で結びついていることが分かる。そして、2 つの要素が修飾・被修飾の関係でつながっている場合よりも、前半要素は後半要素が(名詞化する前の動詞の段階で)要求する意味役割を持つ要素という関係で結びついているときの方が、構造がより複雑になる。その結果、その構造的複雑性が、2 つの要素を一まとめにしてアクセントの計算を行うことの障壁となる、という提案・分析を行った。

次に、例えば「京都産業大学」のように、右枝分かれ構造になっている複合語 すなわち、後半が 2 要素から成るもの の分析にも取り組んだ。こうした複合語は、従来の研究では、前半と後半のそれぞれがアクセントを持っているので、通常の複合語アクセント規則が適用されていない例外的なものとして見なされてきた。しかしながら、統語理論で用いられてきた構成素統御(C-command)という概念を応用してアクセント規則が適用される範囲を決定すれば、右枝分

かれ構造をした複合語のアクセントパターンが容易に説明できることを示した。そして、英語の右枝分かれ構造をした複合語のアクセントにも、同様の説明が成り立つことを明らかにした。

また、日本語の複合語に見られる連濁現象についても、辞書に収載された例を分析するだけでなく、無意味語実験も行って、詳細に検討した。従来の研究では、連濁とアクセントは相補分布の関係にある。すなわち、連濁を起こす例は無アクセント（平板型アクセント）になりやすく、逆に、アクセントを持つ例は連濁しにくい。という傾向が指摘されてきた。しかしながら、この相補分布の関係が成り立つのは一部の固有名詞の場合であって、普通名詞や無意味語の場合には、アクセントと連濁が相補分布になるわけではないことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

太田 聡、日本語複合名詞の非標準的アクセント型について、音韻研究、査読有、21号、2018、81-88

太田 聡、日本語複合名詞のアクセント、ことばを編む、査読有、2018、126-135

太田 聡、連濁とアクセント 普通名詞と無意味語の場合、連濁の研究、査読有、2017、69-94

太田 聡、日本語の名詞形成接尾辞「-さ」と「-み」について、音韻研究の新展開：窪園晴夫教授還暦記念論文集、査読有、2017、84-97

太田 聡、ダジャレ混成について、現代音韻論の動向：日本音韻論学会20周年記念論文集、査読無、2016、112-113

〔学会発表〕(計3件)

太田 聡、日英語の複合名詞のアクセントと構成素統御、隣接諸科学乗り入れ型の手法による音韻理論の外的・内的検証の研究 2018年度研究成果発表会、2019

太田 聡、複合語アクセントに関するいくつかの問題、隣接諸科学乗り入れ型の手法による音韻理論の外的・内的検証の研究 2017年度研究成果発表会、2018

Satoshi Ohta、Memorization or Rule-based Generation? Producing Agentive Nouns and Comparative Adjectives in English、PMCK Summer Conference 2017、2017

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：人文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。